【ポスター発表】

放課後児童クラブ職員研修を通した支援員の意識変化に関する研究

ーアンケートデータのテキストマイニングからー

○　名古屋経済大学　　関谷　みのぶ（004555）
堀　美鈴（名古屋経済大学・009383）

キーワード：放課後児童クラブ・内部研修・意識変化

１．研 究 目 的

本研究では、放課後児童クラブ（以下、児童クラブ）の支援員と補助員（以下、支援員）に対して行った内部研修での自由記述アンケートをもとに、内部研修を通してみられた支援員の意識の変化を明らかにする。

２．研究の視点および方法

児童クラブの保育・教育力の質の向上のためには、支援員の資質向上は欠かせない。多様な経歴と雇用状況の支援員が集まる児童クラブでは、内部研修は重要な意見交流の場となる。A 市において、2017、2018 年度と 2 年間にわたり、児童クラブ内ビデオ研修を実施してきた。2017 年度の研修を終えた時点では、支援員自身の意識の変化や児童クラブの意識の変化について、肯定的な回答がいずれも約 9 割を示していた。[1)]

本研究では、2017 年 9～10 月と 2019 年 3 月に実施した、支援員の意識を尋ねる自由述アンケートに対して、樋口の KH Coder（Ver.3）[2)]を用いたテキストマイニングを行った。

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守し、研究を行った。アンケート項目については、A 市に事前に内容の確認を行い、了承を得て行った。本研究の協力者には、研究の主旨と研究への使用、また、協力は自由意思に基づくこと、データ管理については、研究者が責任を持って行うことを口頭にて説明し、同意を得た。

４．研 究 結 果

①「児童クラブの仕事の大変さはどのようなところですか」（2017 年実施）

61 件、119 文を分析対象とした。記述された内容から「大変」「難しい」「感じる」「思う」を除き、中心性による共起ネットワークの分析を行った（図 1）。記述の中心は、「子ども」「子」に続き、「家庭環境」、「行動」となる。出現回数は、「子ども」(48 回)、「子」(22 回)に続き、「対応」(16 回)、「トラブル」「子供」(12 回)、「多い」(11 回)、「保護者」(10 回)の順となっている。

②「前回の研修以来、あなた自身が意識するようになったことは何ですか」（2019 年実施）

44 件、94 文を分析対象とした。記述された内容から「前回」「思う」「意識」を除き、中心性による共起ネットワークの分析を行った（図 2）。記述の中心は、「子ども」「聞く」であるが、「環境」、「話」「自分」「声かけ」と続く。出現回数が多いのは、「子ども」が 52

回と突出して多く、「遊び」が 13 回、「自分」「聞く」「話」が 11 回となっている。

③「児童クラブを担当していて、課題だと感じる事は何ですか」（2019 年実施）

42 件、102 文を分析対象とした。記述された内容から「思う」「課題」「難しい」「感じる」は除き、中心性による共起ネットワークの分析を行った（図 3）。記述の中心は、「時間」、「気持ち」、「児童クラブ」、「遊び」「子ども」の順に続く。出現回数が最も多いのは、「子ども」(33 回)であるが、次いで、「子」「対応」(15 回)、「高学年」(13 回)、「時間」(11 回)、「遊び」(10 回)となっている。

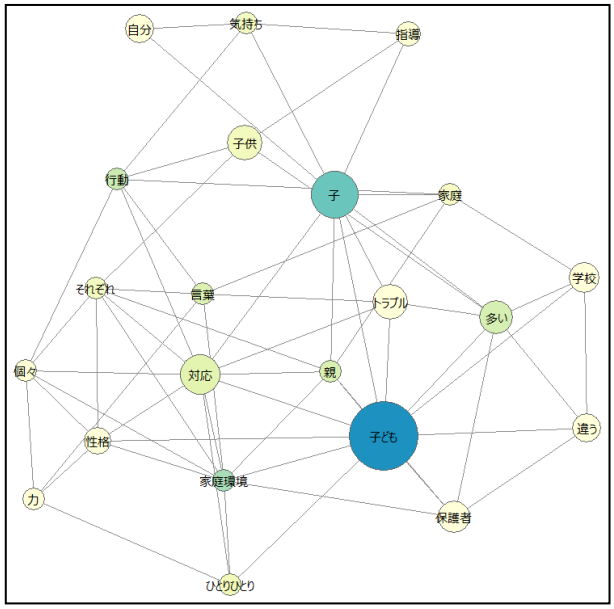

図 1　共起ネットワーク（大変さ）

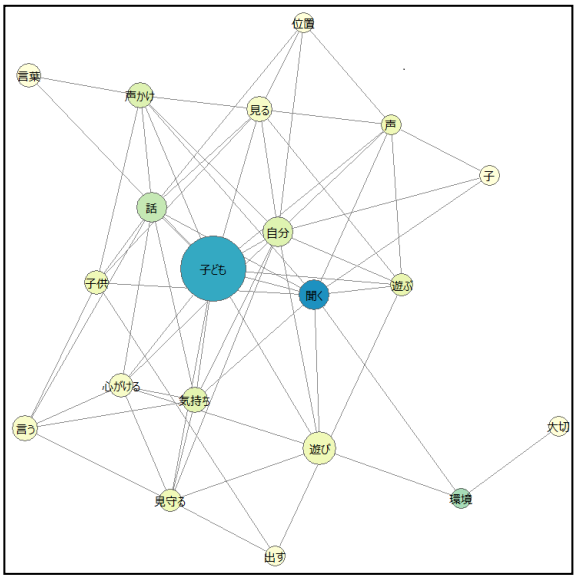

図 2　共起ネットワーク（意識）

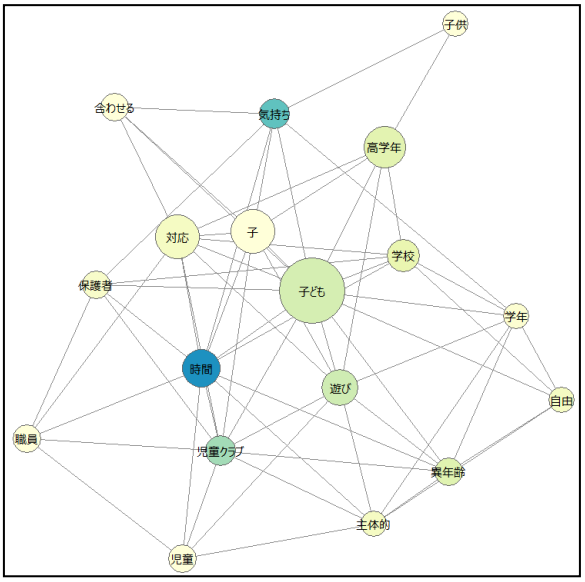

図 3　共起ネットワーク（課題）

5．考 察

子どもを対象とする職であるため、研修の前後関係なく、「子ども」やその類語が中心に、かつ、多く見られることは当然といえる。しかし、2018 年には、「環境」「遊び」「主体的」「見守る」という言葉が現れ、支援員自身が、子どもの人権や主体性を意識し、現状を「子どもにとって」より良い方向へ変えていくことを求め始めたと考えられる。これは、研修時に、ビデオに映し出された自らの姿を恥ずかしがる初回から、子どもの姿や自らのかかわりを客観的に捉えられるようになった 2018 年度の変化とも重なる。今後の課題については、「高学年」「異年齢」といった具体的な子どもの集団について着目されるようになったり、2017 年にはあった「指導」がなくなり、「合わせる」が出てきたことも、子ども主体のかかわりに肯定的な変化と考えられる。

1）日本社会福祉学会第 66 回秋季大会　報告要旨集 PP.353－356
2）樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―』ナカニシ出版